

ゴールデンウィーク休暇中の5月2日、東急Bunkamuraへ「レオナルド・ダ・ヴィンチ 美の理想展」を観に行った。もともとこの日に行こうと思ってはいたが、当日の天気予報は雨。しかも時折風雨が強くなるという。私は一瞬考えたが、どうしてもこの日に行きたいと思いつけることにした。何しろ「晴れ女」だから、そうひどいことにはなるまいと楽観して。さすがに当日は晴れなかったが、出かけるときは雨はやんでいて帰り道も小降り程度だった。

そして展覧会場に入った時、私は荘厳な雰囲気によって圧倒された。イタリアを思い起こさせる独特なポプリの香りが会場に満ちていたせいか、あるいはレオナルドの存在感か、主催者のコーディネートのせいかわからなかったが、それはキリスト教特有の「荘厳」だった。まるで夢の空間を漂うように満ち足りた時間を過ごした。

印象的だったのは、プロローグに展示された「柳」をデザインしたアルベルト・デューラーの作品。「ヴィンチ」の語源は「柳」で、それは村の紋章のようなもので、レオナルドも「モナ・リザ」の服の模様にするほど重用した。学校には行かず常に自分の周りの自然を師としたレオナルド。「自然から学ぶべきであり、芸術の基本は絵画にある」と考えていたレオナルド。「絵画は哲学であり科学である」という言葉は、私には充分理解できた。

そんな気分最後のビデオを観ていたとき、レオナルド・ダ・ヴィンチの命日が5月2日であることがわかった。その生没年を見た時、私は納得した。私が何故きょうを選んだか。おそらく私が選んだのではあるまい。私には「どうしても行きたい」と思うこと、偶然誰かが誘ってくれること、何かの手違いでそうなること、様々な不思議がある。でもそれらは全て「いま、求めていること」を解決してくれ「いま、必要だろうこと」を与えてくれる。だから私は「無神論」ではいられない。何かの力が私を導き助けてくれる。そこには驚きと感謝がある。

そのあと、私はまた神楽坂「アミティエ」にケーキを食べに行った。道すがら「La mer」を口ずさみながら。でも「きょうは何か違う」という気がどこかでしていた。フランス風になることにちょっとだけ罪悪感を覚えた。そして帰り道、イタリア文化会館からきていた写真展案内メールを思い出したが、雨だからやめておこうと思いつきかけた。しかし私は一駅引き返したところで電車を降り反対方向へ乗り換えた。強い引力。それをしなければやまない引力。私はいつでもフランスに惹かれつつ、フランスに埋没することはできない。そしてイタリアに惹かれつつ、イタリアに埋没することができない。いつでも集中して片方へ行こうとすれば、片方から袖を引っ張られているような感覚がある。そしていまのところ、私を強く引っ張るのはこの二つしかない。この二つの引力に疲れた時、私はやすらかに英語の歌を聞く。

でも私は一つだけ気づいている。「歌」の引力はフランスのほうが強く、「絵」の引力はイタリアのほうが強いことを。

その晩、眠りについた私は夢を見た。仏教国の人々の集まりで私は「王様の牢屋」を歌おうとしている。もう何年も前に一度だけ人前で歌った覚えのある歌。何故？ 7小節目の歌詞がどうしても思い出せない。ピアニストと一緒に探しても私のファイルにその歌の歌詞がない。そのとき白髪の婦人が歌詞をくれて目が覚めた。(2012.5.3)